

「文学場」の歴史は可能か？

——松本和也著『日中開戦後の文学場 報告／芸術／戦場』
をめぐって

神奈川大学出版会、2018年、375頁

五味渕 典嗣



松本和也氏の労作『日中開戦後の文学場 報告／芸術／戦場』（神奈川大学出版会、2018年3月）の書評者としてわたしが適格なのか、これを書いているいまも判断がつかかねている。というのも、本書刊行の約二ヶ月後わたしは、ほぼ同じ時期の文学言説と従軍体験者のテキストを対象とした著書『プロパガンダの文学 日中戦争下の表現者たち』（共和国、2018年5月）を上梓したが、わたしがこのテーマに取り組むずっと以前から松本氏は、日中戦争期の文学史的意義に注意をうながす論考を多く発表されていた。さらにわたしは、氏が研究代表者を務めた科学研究費補助金によるプロジェクト「昭和10年代における文学の〈世界化〉をめぐる総合的研究」（基盤研究C、15K02243）の研究分担者としても活動したから、本書に収録された論考へと結実した報告の現場に立ち会い、さまざまに議論を交わしてもいた。つまり松本氏は、わたしにとって дайジな先達であり、協働した研究上の仲間でもある。

だから、〈学術的な公正さ〉という観点からすれば、明らかにわたしは書評者の資格を欠いている。しかし、いまだ十分とは言いがたい1930-1940年代を対象とする日本語の文学研究・批評の今後を考えるなら、5年にわたった研究プロジェクトの時間を共にした一人として、また、文学研究の立場から同じ時期の似たような対象を検討した者として、本書にかんするわたしなりの見解や疑問を記しておくことには、それなりの意義もあるのかもしれない。願わくば、わたし自身にも解決の糸口が見えているわけではない本稿での問題提起が、これからの議論の進展に資するものとなっていればよいのだが。

*

〈言説とは情報である〉。本書の著者は、まるで迷いやためらいを振り切るように、はっきりとそう断言しているように見える。現在進行形の戦争に対する作家たちの姿勢や態度、伝統的に文学史的な整理の際に重視されてきたマルクス主義・左翼運動との距離感だけではない。しばしばアルコールや口さがない噂話が介在した文壇的な社交や、同人雑誌として一つのグループになることもあった人間関係的な離合集散、総合雑誌・文学雑誌・青年雑誌・女性向け雑誌など、ジャンルによってセグメント化された雑誌メディアどうしの競合関係、新聞言説と雑誌言説、雑誌言説の中での読者の複層性やそれぞれが想定するリテラシーの差異など、大文字も小文字も、ともかく〈政治〉にかかわる契機は一度カッコにくくって、情報として抽出された言説の内容に記された論理を徹底して追尋すること。ひとは、決して自由自在に言葉を操ることはできない。それが言葉である以上、すでに語られた言葉との関係を逃れることは不可能で、そのことは、書き手の立場が左だろうが右だろうが基本的に不変である。その意味で本書は、歴史の時間から決して自由になれない人間が、ある種の言葉を語ってしまう／語らされてしまう非人称的な環境を徹底して観察してやろう、という方法的な意志に貫かれていると言ってよい。

では、本書の概要を見ていこう。本書は、全部で9つの章をテーマごとにⅠ・Ⅱ・Ⅲ部と区分し、「補論」を付した構成をとる。冒頭の第Ⅰ部「報告——従軍する文学者／現地報告の眼」は、従軍記者の資格で日中戦争の戦地に向かった作家たちの言葉が、同時代の「文学場」にどのように包摂され、受容されたのが問題となる。

第1章「〔異彩〕の特派員・吉川英治——事変報道と新聞連載小説「迷彩列車」を視座にして」は、

盧溝橋事件から約一ヶ月後、いちはやく『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』特派員として華北に向かった吉川英治の現地報告と、新聞連載小説「迷彩列車」が検討される。注意したいのは、先行研究にあたる神子島健『戦場へ行く、戦場から還る 火野葦平、石川達三、榊山潤の描いた兵士たち』（新曜社、2012年8月）が、「白兵戦のような泥沼の戦場を短期間滞在しただけの吉川が眼にしたとは考えがたく、大きな反響はなかった」とひと刷毛で片付けてしまった吉川の従軍報告と戦争小説を、日中戦争期の〈文学者による戦争の語り〉の水準を構成したものと再評価した点にある。盧溝橋事件後の文学者たちは、社会的なトピックとしての「戦争」とどう向き合うかが問われることになったが、そこで「戦争をモチーフとした作品を、通俗文学者は短期間で、文学者は十分な時間をかけて発表すべきだ」という言説が浮上する。純文学と通俗／大衆文学といういつもの境界線が、「戦争」をめぐるあらためて上書きされていくわけだ。だから、吉川英治がいちはやく戦地に向かい、従軍取材をもとに小説『迷彩列車』を発表したのは、当代を代表する大衆文学作家にふさわしい身振りだった。一方、第2章「特異な現地報告——岸田國士『北支物情』・『従軍五十日』の読まれ方」では、先行研究レベルで「戦争」に対する批判性が指摘されてきた岸田の発言の、同時代的な意味が検証される。岸田は、1937年10月末からの最初の従軍で『北支物情』を、二度目は従軍ペン部隊陸軍班の一員として『従軍五十日』を書いたが、いずれの著作でも、日本軍将兵の前線での奮闘ぶりよりは、現地の中国人たちへの視線や日本軍による文化工作・宣撫工作の困難の方が前景化される。短兵急なナショナリズムに拠らず、この「戦争」に立ちあがる課題の大きさを沈着に記述していく岸田の姿勢は、当時あって、文化人ならではの知的な観察眼の成果として受容された。1940年11月、岸田は文学者・文化人の期待を一身に背負って大政翼賛会文化部長に就任するが、かれを戦時下知識人の代表格に押し上げていく風潮は、こうした日中戦争期のルポルタージュ言説の受容の中で醸成されていたのである。

第3章「従軍ペン部隊言説と尾崎士郎「ある従軍部隊」——文学（者）の役割」で議論されるのは、いわゆる「従軍ペン部隊」の内幕ものとして知られる尾崎士郎の小説だ。この章で著者は、「従軍ペン部隊」の歴史的評価というよりは、それについて語られた言説に着目する。「昭和十三年前半には、文学者を国策へと近づけていこうとする言説と、逆に文学の自律性を守ろうとする言説が拮抗していた」が、「従軍ペン部隊」言説の時点では、即応的に「戦争」を描かずとも、文学者としてこの「戦争」に協力することは可能である、という理路が作られていたのである。尾崎の小説は、戦場に行くけれど「戦争」は書かない書き手たちが、文学者であり、同時に戦時下の「国民」でもある、という二つのアイデンティティを獲得し確認していく様子を行為遂行的に言語化してみせたのだ。

第Ⅱ部「芸術——戦時下の芸術／時局へのリアクション」では、この時期の「戦争」との関係ではむしろ傍系と見られてきた書き手に注目することで、日中戦争期の「文学場」の複雑さが素描される。例えば、第4章「川端康成「高原」連作受容の変遷——日中戦争の長期化／文学場の変容」は、2年にわたる連作として書かれた川端の小説評価をたどり直すことから、「日中戦争後の文学場の変容」を浮上させる試みである。1937年末の発表当初の段階では、川端なりの「戦争」への応接の姿勢が問題化された「高原」は、戦争自体の長期化に伴い、戦時下だからこそ熱心に称揚される「美」の領域を証し立てる文脈で読まれることになった。他方、第5章「岡本かの子の軌跡——現役小説家時代の評価から没後追悼言説まで」では、『老妓抄』を頂点とする岡本かの子作品の高い評価を支えたコンテクストが同定されるとともに、1939年の没後に書かれた多くの追悼言説に、かの子の神話化につながる語りのパターンが看取される。この章では、日中戦争期のかの子の「戦争」協力的な発言が取り出され、「かの子は表現ジャンルを使いわけて、時代に対して両義的な文学活動を展開していたのだ」という、メディア戦略にかかる重要な指摘もなされている。

第6章「井伏鱒二を支える“わかる読者”の登場——「多甚古村」同時代受容分析」では、「多甚古村」への評価を契機として、しばしば平凡さ・凡庸さという特質が語られた井伏作品の「行間」に、芸術的な深さを読み出そうとする評家たちの身振りが問題化される。著者によれば、井伏作品が「わかる」と言表することは、文学言説のインサイダー読者であることを示す一つの証左として意識されており、そうした評価軸の生成が、逆に井伏作品に対する読み方を規定していったのだ。

第Ⅲ部「戦場——描かれた戦場／銃後の受容」では、再び話題が「戦争」と文学とのかかわりに戻る。第7章「火野葦平「土と兵隊」の同時代的意義——文学（者）の位置」、第8章「戦場における“人間（性）”——火野葦平「花と兵隊」序論」では、「日中開戦後の文学場」で「キーパーソンの一人」となった火野葦平の作品が議論される。第7章では、著者の前著『昭和一〇年代の文学場を考える——新人・太宰治・戦争文学』（立教大学出版会、2015年4月）での「麦と兵隊」受容にかんする調査を踏まえ、「土と兵隊」が、より文学性・芸術性を強調する枠組みで評価された様子があとづけられる。さらに、この二作の組み合わせが、「文学の力」を示すものとして、「文学の社会的-国民的意義」を訴求する言説へと転用されていたことも明らかにされる。その一方で、小説的な結構を前面に出した「花と兵隊」は、発表当時、「麦と兵隊」「土と兵隊」ほどの評価を勝ち取ることができなかった。日本軍占領下の中国・杭州を舞台に「人間（性）」の「交通」を描くことで、当面の「戦争」の課題であるところの「文化工作」と切り結ぼうとした物語は、火野をめぐる同時代の期待の地平から逸脱するものとなってしまう。加えて、この第8章では、「花と兵隊」の現行本文と初出との差異を踏まえ、中村研一による挿絵とのかかわりも含めた読み直しの必要が述べられており、注目される。

第9章「戦争（文学）の実感——日比野士朗「呉淞クリーク」試論」では、1939年初めの時点で、日中戦争初期の上海戦線での従軍体験を改めて主題とした日比野の作が取り上げられる。各種メディアで苦戦ぶりが報じられていた過去の戦場を描く際、日比野は、先行する火野葦平と上田廣の同種の作品を読み、その枠組みを踏まえた差異化を図ろうとしていた。そのことが、インテリとしての自己の戦場での回想と内省を、許される範囲で分析的に記述していく語りのスタイルへと結実していたのである。

以上、全9章から成る本書の記述は、日中戦争期の東京を中心とする文学言説の構図を描き出す確かな橋頭堡と言え。とりわけ、第Ⅱ部の3つの章は、現在進行形で展開されていた「戦争」には直接言及しないという関係の仕方を選んだ作家・作品も視野に入れた検討となっており、本書が取り上げなかった書き手の位置を計測する上でも示唆的である。加えて、生身の人間が傷つき・傷つけられる、中国の無辜の人々の生命や財産が不条理に奪われていく戦争の現場を書きつけた言葉すらこともなげに呑み込んで、「文学」の問題へと還元してしまうこのジャンルの、いかんともしがたい業の深さも印象に残る。だが、まさにわたし自身が同時期の類似の対象を扱ってきたがゆえに、本書の記述にいくつかの疑問を抱いたことも事実である。ここではそれを、二つの素朴な問いのかたちで示してみたい。

まず第一に、著者は、文学に関連する言説とそうではない言説とを、どんな根拠・基準で区別しているのか。これは、本書のキーワードに絡めれば、ある言説が「文学場」に参加しているのか否かを、どんな基準で判断し選択しているのか、とも言い換えられる。もうひとつは、『テキスト分析入門 小説を分析的に読む』（ひつじ書房、2016年10月）の編著者でもある松本氏は、文学研究の方法的概念としての「テキスト」と「言説」とをどう捉え、差異化しているのか、ということだ。この二つは、重なりあっているとも言えるが、問いとしての質は異なる。前者は、本書が検討する資料体のコーパスをどう設定するか、という対象設定の問題であり、後者は、そのようにして集積された資料体にどうアプローチするか、という構えと分析手法の問題と言える。

最初の問いから、少し詳しく展開してみよう。本書で松本氏は、「文学場」について、「さまざまな文学活動を、なるべく多くの要素の相互連関が織りなす関係性において理解するために、同時代の視座から総合的に捉えた文学活動-現象の総体を想定している」とまとめている。さらに本書では、この「文学場」内部での運動や傾向を指示する術語として「同時代受容の地平-モード」という概念が提起され、その潮流を捉えることで、「文学場（の一端）を多角的-立体的-歴史的に解明」しようとする道筋が示唆されている。ならば、そうした「文学場」に参加する言説とは、文学者が書いた言説か、文学雑誌に掲げられた言説か、どんな媒体でも文学について書かれていればよいのか、それらすべてを指すものなのか。日本近代文学研究にあって、「言説空間」という曖昧な用語で恣意的に同時代言説を切り出していく論文が濫発されたことを考慮すれば、「文学場」として言説領域を区切った著者のスタンスは誠実だと思う。しかし、構築主義の荒波をくぐったあとでジャンルとしての文学を考える以上、文学言説のウチとソト、各時代に「文学」と見なされている言説とそうではない言説との境界は、不断に揺れ動

く相対的なものと見なさざるを得ない。

かつてガストン・バシュラールは、科学は自律的に発展したわけではなく、同時代の知の水準やイデオロギー的の布置との相関において展開されてきた、と論じた（『科学的精神の形成 対象認識の精神分析のために』平凡社ライブラリー、2012年4月）。文学の歴史も同様だろう。だが、本書の松本氏は、「文学場」の言説とその外部とのかかわりには、あまり関心を向けていないように見える。なるほど「社会」「戦争」といったトピックは掲げられるが、あくまでそれは、氏の措定する「文学場」が包摂し、「文学」の問題として変換した限りのものでしかない。では「文学場」の言説は、同時代の他の〈界〉との関係において、どんな位置・役割を受けとっていたか。「文学場」の言説が、いかなる歴史的・政治的・社会的・イデオロギー的な力との葛藤・交渉にさらされていたか。本書の明晰さは、氏の描出した「文学場」の内側で語られた言説の論理を同定していくスタンスの上に成り立っている。だが、そうした〈中の人〉たちの理路を記述していけば、「文学場」の「歴史」を書くことができるのだろうか。

もう一つの問いは、研究実践上のアポリアとでも言うべきものだ。文学研究・批評の対象は語られた／書かれた文字の集合だが、しばしば言われるように「テキスト」は、文学作品だけを指す概念ではない。外形的にはどれが「テキスト」で、どれが「言説」かを明示的に区別できない。現に松本氏も、先掲の『テキスト分析入門』で、「ナラトロジーを援用したテキスト分析の方法論は、文学（研究）にとどまらず、映画やTVドラマ、ファッションから歴史記述、さらには新聞報道や社会現象など、よりひらかれた対象にも応用可能な、文学（研究）発の知見として、重要かつ使い勝手のよい、便利な財産であるとも考えられる」と書き記している。だが、少なくともわたしには、本書において、そうした方法的「財産」が活用されているとは見えなかった。同時代の作品受容にかかる論点をアルファベットの箇条書きで分類整理したスタイルが典型的だが、本書で「言説」は、基本的にはそこから内容的なデータを抽出する資料として遇される。〈何が書かれたか〉という面が中心化され、その言説が、いつ・どこで・誰に向けて・いかに書かれたかという問題は後景化されているように見える。

慌てて付け加えるが、おそらくこれは、本書の方法的な選択にかかる問題だ。本書の議論が、特定の文学作品だけを「テキスト」とし、それ以外の言表を補助的な資料として位階化していくような、安易な文学中心主義に陥ってはいないことも事実である。しかしながら、本書においては、資料となる言説も含めて「テキスト」として扱った際に浮き彫りとなるだろう論理のつまづきや矛盾、空白や飛躍、相異なる文脈やコードの葛藤や衝突といった契機は、取り落とされてしまっているように見える。そのため、ある作品と受容の現場との齟齬や、一定のテーマやトピックをめぐる議論が展開する過程で、意味内容の力点が組み換わっていく局面を見定めていくことが困難になっているのではないか。比喩的な言い方が許されるなら、本書の行き方では、確かに日中戦争期の「文学場」の地図は描けるが、文学言説をめぐる／文学言説の場において生起する力の様相を捉えきれないように見えるのだ。

もちろん、これは望蜀の言でしかない。あらゆる言説を「テキスト」として扱うことは、理論的には可能だとしても、現実的にはとても難しい。また、先掲の拙著では、文学言説の社会的な位置とその辺縁を記述するために、検閲をはじめとする統制権力とのかかわりを積極的に問題化したが、それがうまくいったかどうかは別の問題である。本稿の冒頭で述べたように、これらは研究方法にかかる根本的な問題であり、簡単に答えが出るようなものでもないだろう。

「補論」で著者は、産出される言説の量が目に見えて減少する「昭和一〇年代末」を取り上げる際には、「何かしらの手立て」=新しいアプローチが必要だ、と述べた。本稿の贅言が、その「手立て」を構想するほんのささやかな一助となっていれば、と願わずにはいられない。日中戦争期・アジア太平洋戦争期の日本語の文学言説の諸問題を探究する者の一人として、また、日本語の文学言説の戦時と戦後の連続性に関心を寄せる者の一人として、わたし自身も、さらに切磋琢磨を続けていきたいと思う。

（ごみぶち のりつぐ 大妻女子大学教授）